

指揮：菅原崇史(すがわら たかふみ)

札幌市出身。高校時代より独学で指揮を始め、パシフィック・ミュージック・フェスティバルを始め各種音楽祭、セミナーで研鑽を積む。大学では音楽学(専門は近現代音楽)を専攻。

ファゴットを高橋勝夫、山本和宏に師事。特に古典、初期ロマン、近現代の作品の演奏を積極的に行っている。

指揮：金沢彩子(かなざわ あやこ)

神戸女学院大学音楽学部音楽学科ピアノ専攻卒業。卒業後、奨学金を得て英国王立音楽院音楽修士課程伴奏科入学。DipRAMとChristian Carpenter Piano Accompaniment Prizeを得て同音楽院卒業。イタリア・イモラ国際ピアノアカデミー室内楽科修了。その後、英国王立スコットランド音楽院伴奏研究員を経て2010年、アジア人としては初めてスコティッシュオペラのコレパティトゥーア研究員となる。

室内楽をMichael Dussek, Konstantin Bogino氏、声楽伴奏をAudley Hyland, Duncan Williams, Timothy Dean氏、ソロピアノをBoris Bekhterev, Tessa Nicholson, John Thwaites氏に学ぶ。ロームミュージックファンデーション指揮者セミナー受講、湯浅勇治氏、三ツ石潤司氏に師事。現在、神戸女学院大学伴奏要員、関西二期会ピアニスト。

ピアノ：梶岡肇(かじおか はじめ)

本職は数学の教師で、現在大阪府立高校で教えております。全くのアマチュアですが、ピアノを通じて多くの方々と音楽の素晴らしさを共有したいという気持ちで、拙い演奏ではありますが活動を続けております。アンサンブル・フロイントの皆様と共演させていただくのはこれで3回目になります。

なお、私の主な活動拠点は日本アマチュア演奏家協会(APA)という室内楽中心の組織です。興味のある方はウェブサイト(<http://www.apa-music.org/>)をご覧ください。

♪指揮者

菅原 崇史
金沢 彩子

♪コンサートマスター

中川 幸治郎

♪ヴァイオリン

池本 経子
恵納 圭司
太田 智子
加藤 陽子
金塚 麻由
桑元 紳
田辺 由美子
福島 史子
堀岡 篤史
松井 謙太郎
向井 嘉奈子
八杉 治美

♪ヴィオラ

池田 裕子
上田 秀樹
雑賀 一成
馬場 香澄
松野 美奈子

♪チェロ

小野 健一
嘉田 友保
岸本 深
富島 誠一
原田 信彦
藤本 綾
山口 健

♪コントラバス

昌山 淳一
千葉 智子
長澤 昌平

♪フルート

板本 郁恵
大西 裕子

♪オーボエ

新井 理恵
古川 正広

♪クラリネット

澤井 一
中辻 圭郁

♪ファゴット

大友 一三
大脇 泰輔

♪ホルン

石崎 和宏
大久保 有香
高橋 万里

♪トランペット

秋山 裕子
岸田 智子
福永 美子

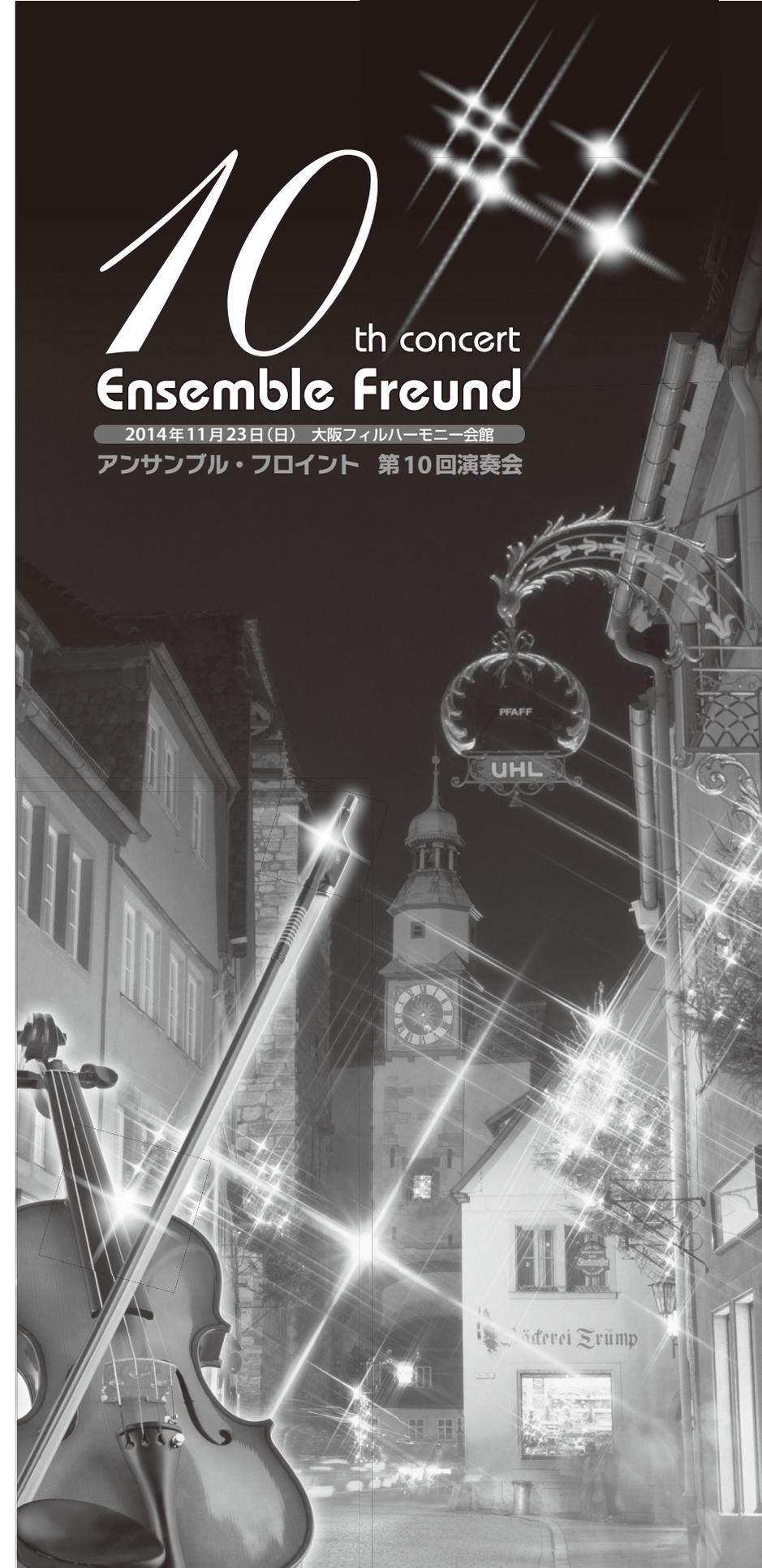
♪ティンパニ

吉田 眞二

10th concert

Ensemble Freund

2014年11月23日(日) 大阪フィルハーモニー会館
アンサンブル・フロイント 第10回演奏会



モーツァルト／歌劇「フィガロの結婚」序曲 K.492

Wolfgang Amadeus Mozart

“LE NOZZE DI FIGARO” Ouverture K.492

■ 指揮：金沢彩子

モーツァルト／ピアノ協奏曲第24番 ハ短調 K.491

Wolfgang Amadeus Mozart

Klavierkonzert Nr.24 C-moll K.491

第1楽章 Allegro

第2楽章 Larghetto

第3楽章 Allegretto

■ ピアノ：梶岡肇

■ 指揮：菅原崇史

*** 休憩 ***

ベートーヴェン／交響曲第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

Ludwig van Beethoven

Symphonie Nr.3 Es-dur op.55 "EROICA"

第1楽章 Allegro con brio

第2楽章 葬送行進曲 Adagio assai

第3楽章 Scherzo Allegro vivace

第4楽章 Allegro molto

■ 指揮：菅原崇史

■ 管弦楽：アンサンブル・フロイント

モーツァルト／歌劇「フィガロの結婚」序曲 K.492

フィガロの結婚は数多くのモーツァルトによる傑作オペラブッフアの中でも最も上演回数が多いものの一つであり、とりわけ、エネルギッシュな旋律は様々な楽器編成でも編曲され、知名度の高い序曲です。

フィガロの結婚は1786年5月1日、ウィーンのブルク劇場で初演されました。この劇場ではドイツ語によるオペラを主に演奏していましたが、フィガロ初演3年前の1783年にイタリアオペラ製作へ方向転換した所でした。フィガロの原作である「狂おしき一日、あるいはフィガロの結婚」はフランスの劇作家であるカロン・ド・ポーマルシェが1784年に書いた戯曲で、「セビリアの理髪師」「罪ある母」と共に3部作となっていました。この3部作は封建貴族の無気力や墮落を痛烈に批判しており、上演禁止になるほどの作品でした。しかし、前作である「セビリアの理髪師」のオペラ化が大変な好評であった為、続編を見たい人々の好奇心が高まっているところ、モーツァルトと台本作家のロレンツォ・ダ・ポンテは上手く皇帝を懐柔して上演の許可を得たとされています。

オペラは序曲と全4幕からなるオペラブッフア形式で作られています。モーツァルトの他のオペラと比べて複雑で息もつかせぬストーリー展開が特徴ですが、モーツァルトはそれを重唱で巧みに表現しています。とりわけ20分以上に渡る2幕フィナーレのアンサンブル、3幕の6重唱の美しさは有名です。

舞台は18世紀半ばのスペイン・セビリア近郊のアルマヴィーヴァ伯爵の屋敷となっています。国こそ違えど、市民階級の活力と貴族階級の墮落というテーマは、当時のウィーンの人々には身近に感じられたことでしょう。

調性は、有名な曲と言えば交響曲「ハフナー」や4手のためのピアノソナタK.381等と同じ二長調で、輝かしくドラマティックなこの調を序曲に使っています。短いながらもソナタ形式で出来ており、特徴としてはアダージョの序奏がない所、繰り返し用いられる半音階、流れ落ちるような下降音型、再現部に戻ってからの大きな盛り上がり等があげられます。

市民のざわめきが遠くから聴こえてくるような冒頭のユニゾンがファゴットと弦楽器によって提示されます。フルートやオーボエといった高音の管楽器が期待感に満ちたパッセージで受けると、瞬く間にFで爆発する様は、このオペラのテーマの一つである市民階級の活力を表しているかのようです。経過部では木管楽器と弦楽器による半音階のアンサンブルが魅力的です。第二テーマは本編の合唱部分である村の人の音楽と通じるような素朴さを持っています。最後は流れ落ちる下降音型でたたみかけるようにクライマックスを作っています。

モーツァルト／ピアノ協奏曲第24番 ハ短調 K.491

優れたピアニストでもあったモーツァルトは、自分の演奏技巧を聴衆に披露するため、20数曲ものピアノ協奏曲を生み出した。音楽的自己表現が最もでき、かつ当時一番聴衆に人気を博したのがピアノ協奏曲で、モーツァルトは学んだ作曲技法やアイデアの多くをピアノ協奏曲に注ぎ込んでおり、彼の音楽の全てが詰まっているといっても過言ではない。24番の協奏曲は、数少ない短調で書かれた作品。直前に書かれた23番イ長調の生命力に満ちた明るさとは対照的な、内向的だが情熱的な作品。一曲目に演奏される

フィガロの結婚とほぼ同時期に作曲され、ウィーン移住後のモーツァルトの一つの充実を表す作品だ。

第1楽章：Allegro

重々しいが、モーツァルトらしい主題で曲は始まる。分散和音、不安定な跳躍、半音階進行で成り立った凝った印象深い主題。形をかえ、この楽章の隅々まで関わり支配する。

第2楽章：Larghetto

優雅なラルゲット。ピアノと木管楽器の対話が美しい。つかの間の休息。

第3楽章：Allegretto

変奏曲。不気味だが物悲しい行進曲。

中間部に突然表れる木管楽器による明るい旋律を経て、疾走するフィナーレへ。

ベートーヴェン／交響曲第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

現在残っている英雄の浄書スコア(原本は残念ながら紛失)の表紙には、当時フランスで活躍したナポレオンへの献辞があるが、激しいペン先で抹消されている。ナポレオンと結び付けられて語られることが多いこの曲だが、後の『田園』と違い、この交響曲は『英雄』を音楽的に扱ったものではなく、むしろベートーヴェンの音楽的欲求の巨大化によって生まれた、それまでにはなかった交響曲ととらえるべきだと思う。長大な1楽章、そして優雅な音楽を演奏するのがお決まりであった2楽章に暗く悲しい葬送行進曲を導入し、軽やかなものが多かったフィナーレに自由な変奏曲やフーガを用い、重厚な形にした。全体で50分を超える長さは当時の常識からすると考えられないものだ。楽器用法でも、管楽器の扱い特にホルンの用法の拡大は、華やかで力強い効果を生み出している。

第1楽章：Allegro con brio

2つの主題からなるソナタ形式。特に展開部からの拡大、盛り上がりは類のないもの。シンコーションと複雑なリズムの組み合わせが強烈な印象をもたらす。

第2楽章：葬送行進曲 Adagio assai

重苦しい主題に始まり、しばらくすると伴奏音型に後の運命動機が現れる。希望を時に見せるが、すぐに否定され、最後には力尽きる。多彩なハーモニーがロマン派の音楽に明日を踏み入れたかのよう。

第3楽章：Scherzo Allegro vivace

一転して軽やかなスケルツォ。交響曲史上今まで用いられたメヌエットからいよいよ決別。変則的なリズムパターンと、突如湧き上がるF。中間部のホルンを始めとした管楽器の活躍が華を添える。

第4楽章：Allegro molto

嵐のような始まりから弦のピッチカートによる変奏曲主題に移る。この主題が自由に変奏され、全休止の後、木管楽器による落ち着いた主題が盛り上がりを見せ、最後は暴発的な全奏により圧倒的なフィナーレ。